濃い人間関係、強い絆「東京の隣」利点生かして

塗料製品、石油製品販売の株式会社富田商店（本社・川口市飯塚）相談役の富田英雄さん（84）は「縄文川口人」を自称する生粋の川口っ子。川口に生まれ育ち、ビジネスはもちろん、青年会議所や法人会、町会などの活動を通し人脈と交友関係を築いてきた。「川口の人間関係はどこよりも濃い」と語る富田さんから見た川口とは。

荒川を泳いで渡る

富田さんは1939（昭和14）年3月、川口市栄町で塗料・油脂販売業を営んでいた将英さん、美代さん夫妻の次男に生まれ、1歳の時に引っ越した飯塚地区で育った。

富田さんが子どもの頃の川口は「鋳物の街」の代名詞どおり、鋳物業と機械業が今よりずっと盛んだった。また安行地区では鋳物と並ぶ植木産業が活況を呈していた。

子ども時代はベーゴマ、メンコ、馬跳びといろいろな遊びをしたが、特に印象深いのは水練（水泳練習）だという。小学生だった昭和20年代、市内の小学校でプールがあったのは第一小学校（現在の本町小学校）だけ。富田さんは国民学校（当時の小学校）1年生の時から、荒川にあった水練場で水練にいそしんだ。川に入る際は、赤い帽子をかぶった男性が指導に当たってくれたという。

泳ぎは得意で、小4の時に対岸の東京・赤羽まで荒川を泳いで渡ることに成功した。「こっち（川口側）は遠浅なんだよ。だから少し行けば大丈夫だろうと思ったんだけどとんでもない。向こう（赤羽側）は川底を掘削して杭を打ってある。あと10メートルくらいの所で力を抜いたらボコボコボコッと（沈んで）、死ぬかと思ったよ（笑）」

屋根かすめたB29

荒川は流れが速いし、深い所は夏でも水が冷たい。「泳ぎは川が一番難しい。それこそ河童がいるんじゃないかと思ったよ」と話す富田さん。「それでも一番危なかったのはやはり戦争の時だな」と振り返る。工業都市で軍需産業も多かった川口は、終戦近くなると頻繁に空襲を受けた。1944（昭和19）年の初めには、赤羽にあった高射砲隊の迎撃を受けた米軍のB29が富田さんの自宅近くに墜落したことがある。火だるまになった機体がごう音とともに自宅の屋根から100メートルほど上空をかすめた時は「うちに落ちるんじゃないか」と生きた心地がしなかった。

1945（昭和20）年3月10日の東京大空襲も忘れられない。「空を見たら荒川の向こう側が真っ赤だった。幼いころでもそういうことは覚えているよ」と語る。

終戦の詔勅を聞いたのは小1。「うれしかった。ああ、良かったと思ったよ。だってもう（空襲警報で）逃げる必要ないんだもの」

濃い人間関係の絆

戦時中の近所付き合いは濃密だった。「向こう三軒両隣と言われるくらい、人間関係を密にしなければ戦えない。銃後の守りがあるからね」。戦争がようやく終わり、世の中はガラッと変わった。しかし川口の人間関係の濃さは変わらない、という。

川口青年会議所の創立以来のメンバーで、40歳まで活動した。青年会議所の役職に加え関東地区の委員長も務め、県内および関東各地を回った。「大宮や浦和の青年会議所の諸君はね、われわれのことを『川口モンロー主義』と言ってましたよ。独特の強い絆がありましたからね」

川口の人間関係が濃いのはなぜか。「鋳物業、機械業がメインの職人の街でしょ。かつては徒弟制度があり、社長のことを親方と呼び、商人の家なら旦那と言った。そうしたことから、川口ならではの人付き合いが生まれた」

「どこの地域でも『うちが一番』と思うでしょうが、われわれ川口の絆はよそよりも濃いと思いますね」

元川口市長の永瀬洋治氏は「刎頸の友」で数十年の付き合いだった。今も富田さんの自宅で開かれる国際政治経済研究会の会員を中心とした〝爺放談会〟には、商工会議所の役員をはじめ市内の友人たちが顔をそろえる。

「隣は東京」の利点

富田さんは川口の良い点として「川ひとつ越えれば東京」という地の利も挙げる。距離的には浦和や大宮より東京に近いが、不動産価格は川口の方が安くて済む。「だから新しく来た人は川口は住みやすいと言うよね。家のローンを組むと数千万円の差が出ることもある」

近年、川口は「本当に住みやすい街大賞」で2020年、2021年と2年連続で1位になるなど注目を集めている。現在は合併してさいたま市となった浦和、大宮も同様のランキングで上位に入る。「私たち川口人の考え方では川口、浦和、大宮の3都市はほぼ五分五分なんです。浦和は文教都市だし、大宮は商業都市で交通の要衝。そうした中で早くに鉄道を通した川口の指導者には先見性があった」と指摘した上で「若い人たちには、東京に近いという川口の利便性をもっと生かすことを考えてほしいね」

富田 英雄 さん（84歳）

川口オートを支援

地元の公営競技、川口オートレースを盛り立てようと、2019年から自身の冠レース「トミーズカップ」を主催している。コロナ禍による中断を挟み、2023年3月には4年ぶりとなる第2回大会を開催した。

公営競技の中でもオートレースは「一番経営が厳しい状況」と富田さんは話す。競技場が全国に5場しかないためスケールメリットに乏しく、売り上げも競馬や競輪、競艇に比べ低迷。「このままではなくなってしまう可能性もある」と心配する。

オート歴は60年以上。50歳まではレース期間中の毎日、レース場通いをした。往時は「札束を懐に入れてエイッとやったもんだけど、今は百円単位。認知症予防だよ」と笑う。オートレースだけでなく競馬も浦和や大井、東京（府中）競馬場へ通い、競輪は大宮、かつての後楽園にもよく足を運んだ。今も川口オートレースはテレビのCS放送での観戦を欠かさない。

第2回トミーズカップの賞金は第1回から倍増の100万円にした。レース当日は、多くの友人や知り合い、奥ノ木信夫市長らも顔を見せる。「オートレースの火を絶やさないため、来年もやります。死ぬまでやるよ」ときっぱり。その口ぶりには川口愛があふれている。

PICK UP! KAWAGUCHI

川口オートレース場

わたしの おすすめ の場所

自身の冠レース
「トミーズカップ」を開催。

1周500mのオーバルコースで8選手が順位を競う。その激しさから「走る格闘技」とも呼ばれるオートレース。時速150キロの高速バトルから生まれる熱いドラマに、富田さんも魅せられた一人だ。

荒川

わたしの 思い出 の場所

水練（水泳練習）では
対岸の赤羽まで泳いで渡った思い出の地。

現在の荒川河川敷には、運動施設やドッグラン、バーベキュー広場などを整備した「荒川運動公園」があり、季節ごとにいろいろな種類の虫や草花が出迎えてくれ、自然の中でのびのびと遊ぶことができる。

川口に住んでみて

「自宅近くの公園もお気に入り」

「住みやすさ」を実感

伊藤（いとう） 俊也（としや） さん（44歳）、純子（じゅんこ） さん（43歳）、有希（ゆき） さん（5歳）家族

伊藤俊也さん（44）は妻の純子さん（43）、娘の有希さん（5）と3人家族。2013年1月に結婚して住んだ千葉県浦安市から、一戸建てを購入し2015年7月に移り住んだ。川口に移ったのは「良い物件があったから」だが、都内に通勤するお2人にとって都心へのアクセスの良さは必須。故郷の山形へ帰る際に大宮から新幹線に乗れる便利さも魅力だった。

物件の下見で初めて川口駅に下り立った俊也さん。実はそれまで川口に対して特段印象は持っていなかったが、駅前に並ぶ商業施設や高層マンションに「住みやすそう」と好印象を持った。きれいに整備された道路も良かった。純子さんも「駅からの道路が広くて歩行者と自転車の通る場所が分かれているのも、小さな子がいる私たちにはありがたい」と話す。

家族のお気に入り

公園が多いのも子育て中のお2人にはうれしい。「コロナ禍で私が在宅勤務だった時もお昼休みに子どもを連れて行ってリフレッシュできました」と純子さん。ララガーデンやアリオといったショッピングモールも有希さんのお気に入り。グリーンセンターは「家族の遠足」で出かけるし、科学館は大人も子どもも楽しめる魅力的な施設。荒川の河川敷を散歩し、毎年桜の季節に家族で写真を撮るのも恒例行事だ。

外国人の多さも川口の特徴。ご近所や有希さんの通う保育園にも外国から来たお友達がいるが、みんなとても仲が良いという。「お隣の中国のかたは毎朝、玄関前の掃き掃除をしているんですよ」と俊也さんが感心すれば、純子さんも「国とか関係なく、小さい時から自然とお友達ができるのはすごく良いなと思います」と歓迎する。

少子化はさらに進行し、これから人口減少社会が本格化する。俊也さんは「子どもを持つ世帯が増えなければ街は活気をなくしてしまう。これからも街の魅力をどんどんPRしていただいて、川口に移ってくれる人が増えればいいですね」と期待している。

あなたとKAWAGUCHI

ここ数年、「本当に住みやすい街大賞」で4年連続ランクインするなど住みやすさで注目を集めている川口市。人気ぶりを反映し、市外だけでなく埼玉県外から移ってくる人も多い。「住みたい街」として川口が選ばれる理由は何か。子育て中のご夫婦と単身の男女に、川口に住もうと決めた理由や実際に住んでみての感想を伺った。

都会過ぎない心地良さ

奈良岡（ならおか） 真生子（まいこ） さん（27歳）

「豊かな自然に触れるのも心地よい時間」

青森県出身の奈良岡真生子さん（27）は2021年10月に市内に転居した。

大学卒業後、さいたま市に住んでいたが、先輩を訪ねて川口に通ううちに「良い所だな」と思うようになった。川口に対する先入観から来ていたネガティブなイメージが覆され、さまざまな地方の出身者が集まっていることにも懐の深さを感じた。

都心に出やすく電車の本数が多いのも利点だ。ただ実際住んでみて、意外に多くの自然が残っていることも知った。「木々も豊かだし、田舎要素みたいなものがある。都会過ぎないところが、個人的には居心地良いですね」

都内に出かけることも多いが、「人が多い都心のごみごみした所には住めない」とも思っている。川口くらいの〝都会度〟がちょうど良いようだ。

多い？東北出身者

東北方面へ向かう新幹線が大宮駅を通っているせいか、川口には東北出身者が多いように思えるという。同じ職場には岩手県出身の人がいるし、川口に移ってくる時にお世話になった不動産会社の担当者は青森の地元が同じだった。「東北出身の人が周りに多いから心強いし、安心できるというのはあるかもしれないですね」

普通に生活するのに必要なものは何でもそろうのも助かる。飲食店は「いろんな店がありすぎて。（職場の）先輩方に連れていってほしいんですけど」と笑う。

※年齢は11月1日現在。

人の優しさ、柔らかさ

坂瑞（さかみずき） さん（25歳）

「休日には川口駅東口の商店街を散策する」

今年4月、市内の機械部品メーカーに就職した坂瑞さん（25）。大学時代に暮らした鹿児島市から引っ越してきた。

大阪出身。「関東で働きたい」と今の会社を選んだ。川口は事件が多いのかなという印象を持っていたが、住んでみればそんなことはなく安心して暮らせている。「どこに行くのも楽で便利。電車もあまり混んでいないし、イメージしていた関東の住みにくさはなかった」

休みには繁華街へ出かけていたが、やがてのんびり過ごしたいと思うように。すると「川口の良さが余計に分かった」。まず人が優しく、コミュニケーションが柔らかい。歩行者がせかせかしておらず、信号を無理に渡ろうとしないのも新鮮だった。以前住んでいた土地では「信号を見ずに渡るし、車は反射神経で止まる感じ（笑）」だそうだ。

休みは商店街歩き

休みの日は川口駅東口の商店街をぶらつく。活気があり、店は地元に根差した感じがする。特に行き先を決めず気になった店に入ることが多いが、カフェ「ブルーミーズ」はお気に入り。店内のあちこちに花が飾られ、吹き抜けの明るい雰囲気が好きという。

ショッピングモールも好きで、アリオなど「必要なものがコンパクトに全部そろっている」のが良い。もし欲しいものがなくても1日か2日で届く物流の良さは「鹿児島にはなかった」

趣味はアート鑑賞。川口駅西口に美術館が建設される予定と聞き、オープンを心待ちにしている。